

平成28年度対人援助研究ブランディング看護・医療福祉部門 超高齢社会における高齢者・認知症者の健康及び世代継承性・ 社会貢献活動に関する看護カフェモデルの構築 第Ⅱ編 — 認知症カフェ実態調査報告 —

広島文化学園大学看護学部・看護学研究科

河野 保子, 土肥 敏博, 加藤 重子, 讃井 真理, 森田 克也
大塚 文, 前信 由美, 岩本 由美, 田村 和恵, 佐藤 敦子
今坂 鈴江, 風間 栄子, 岡田 京子

キーワード：認知症カフェ, 来んさいカフェ, 研究ブランディング事業

ショートタイトル：認知症カフェ実態調査

■ はじめに

全国の65歳以上の高齢者において、認知症有病者数は約462万人と7人1人（有病率15%）（平成24年；厚生労働省 社保審一介護給付費分科会¹⁾）であったが、8年後（平成37年、2025年）には約700万人、5人に1人になると見込まれている（H26年度厚生科学研究費補助金特別研究事業）。また全国のMCI（軽度認知障害）の有病率推定値は13%、MCI有病者数約400万人と推計されており、認知症の早期診断・早期対応、認知症に対する認識の普及・啓発、認知症者の見守り等の生活支援の充実等により、地域での生活継続を可能にしたり、安心して生活できる地域づくりを国は奨励している。厚生労働省は、「認知症施策推進5か年計画（オレンジプラン）」（平成24年9月）、引き続き「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）」（平成27年1月²⁾）を策定している。その中で、「認知症の人の介護者の負担を軽減するため、認知症初期集中支援チーム等による早期診断・早期対応を行うほか、認知症の人やその家族が、地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う認知症カフェ等の設置を推進」することが謳われている。先般開催された第32回国際アルツハイマー病協会国際会議（2017.4、26-29、京都）において、認知症の人に優しい社会づくり「行動計画」を世界各国が国家戦略として取り組むことが提言された。その内容は、社会啓発、リスクの軽減、介護者支援、診断、研究が挙げられ、なかでも認知症の人に優しい社会をつくるための啓発キャンペーンをすることが謳われた。認知症に関する国家戦略を策定しているのは日本や英国で、とくに日本のオレンジプランを参考にした提言で、日本は世界のお手本としての取り組みを進め、各国の支援に力を入れてほしい（WHO カトリン・ゼーハー）と日本への期待が寄せられた。

このような観点から、今日、認知症高齢者や家族に対する様々なカフェ事業が数多く展開されており、調査報告書（認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業 報告書2013³⁾）や若年性認知症の人が認知症カフェに外出することの有効性に関する研究報告（佐藤ら、2016⁴⁾）も散見できる。しかし、認知症者や家族にとって必要かつ望ましいカフェの在り方は今なお確立されておらず模索中であると言っても過言ではない。

以上、認知症者を対象とした様々なカフェが実践されている。しかし、その効果についてはほとんどの場合、高齢者カフェ同様に実施主体者の経験知中心であること、体系的なプログラムが少ないこと、

かわの やすこ

〒737-0004 広島県呉市阿賀南2-10-3 広島文化学園大学大学院看護学研究科

カフェの有効性（エビデンス）に関する報告が見当たらないこと等、カフェの在り方に更なる検討が必要である。こうした背景のもとに、高齢者・認知症者カフェにおける対人援助研究を通して、一般化・普遍化できる看護カフェモデルの開発は、高齢化社会における重要な位置づけにあるため本研究を着想した。

本研究“超高齢社会における高齢者・認知症者の健康及び世代継承性・社会貢献活動に関する看護カフェモデルの構築”は、文部科学省平成28年度「私立大学研究ブランディング事業」タイプAに採択（2016年11月24日）された本学の「地域共生のための対人援助システムの構築」の事業の一環として実施するものである（第Ⅰ編参照）。なお、本研究の実施に当たっては看護総合研究センターの支援を得た。

■ 研究目的

本研究は、集いの場となる認知症者カフェを提供することにより、認知症者の身体機能・認知機能が異世代交流、役割・能力の発揮を通して生活の活性化やQOLの向上につながることを明らかにする。また、認知高齢者に対するヒーリングタッチ（癒し）がBPSD（行動・心理症状）の緩和や心身の平穏につながることを、認知症者の支援者の負担軽減につながることを明らかにする。

本研究から得られる科学的エビデンスを踏まえて、認知症者カフェの介入プログラムを開発し、一般化・普遍化できる看護カフェモデルを構築する（第Ⅰ編図1参照）。

■ 方法

平成28年度の実施計画に基づき、呉市に開設している認知症カフェ、および広島市や他府県で開設されている特徴的なカフェの実態調査を行い、情報を収集した。調査項目表は、認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業 報告書（2013）³⁾を参考に本学が実施する観点からの調査項目を加えたものを作成し、聞き取り調査を行った。カフェ開設に必要な条件（運営母体、実施されているイベント、参加者への波及効果など）に加え、特にどのようなカフェを開設すれば大学カフェとしての特徴が出せるのか、既存のカフェとの差別化をどこに求めるのかという視点を考慮した。中でも、本学部には他に例をみない「認知症看護強化コース」という教育課程があり、ここに学ぶ認知症看護に関して一定の教育を受けた学生をいかに参画させるかという点に注目した。

■ 結果

厚生労働省は、「今後の認知症の施策について」の方針を示し、それに基づくオレンジプラン、新オレンジプランが策定され、その普及を呼びかけている。広島県では17件の認知症カフェ【オレンジカフェ】が開設されている（表Ⅱ-1）。

認知症カフェとは、「認知症の人と家族、地域住民、専門職等のだれもが参加でき集う場」と定義されており、その中で「認知症カフェ」に行くことで認知症の人、そしてその家族が得られる15個のメリットを謳っている⁴⁾。認知症者は年々増加しており、その対策は喫緊の社会的ニーズである。このような時代背景のもとに、認知症カフェは各地で多く開設されるに至っている。

平成28年度呉市認知症カフェ事業では、市内に9か所の特徴ある認知症カフェが開設されている（表Ⅱ-2）。

呉市介護保険課介護予防グループの認知症カフェ事業は、認知症に不安を感じておられる方をはじめ、地域の皆さんが安心して「ほっと♥」できる場所（カフェ）、気軽に立ち寄れる場を提供している。その役割は以下のように集約できる。

- ①認知症の方とその家族が、いつでも気軽に相談できる場
- ②認知症の方が、病気であることを意識せずに安心して過ごせる場
- ③認知症の方とその家族と一緒に参加でき、地域の皆さんが参加・交流できる場

表Ⅱ-1 広島県の認知症（オレンジ）カフェ

市区町村	カフェ名称	住所	TEL	開店日	時間
安芸郡府中町	だんだん	安芸郡府中町浜田本町5-25 ふれあい福祉センター 4F 研修室	082-285-7278	毎月第1金曜日	10:15～11:45
尾道市長江	オレンジカフェ	尾道市長江2-7-8 小規模多機能ホーム長江	0848-37-6101	※要問合わせ	※要問合わせ
神石郡神石高原町	認知症予防カフェ ふれあい	神石高原町福永1578 ふれあいサロン呉ヶ峠	0847-87-0012	※要問合わせ	※要問合わせ
竹原市下野町	梅一輪	竹原市下野町1656-10 デイサービス竹の子	0846-22-1135	毎月第3土曜日	13:30～
東広島市西条町	etto Smile Cafe (えっと すまいる かふえ)	東広島市西条町御園宇703 宗近病院 ケアセンター 2F	082-493-8651	毎月第2土曜日	13:30～15:00
広島市安佐南区	認知症サロンユニバーサルカフェ山水	広島市安佐南区西原8-33-3 西原セントラルクリニック	082-424-1266	毎月第3水曜日	13:30～
広島市南区	オレンジサロン	広島市南区皆実町1-6-29 広島県健康福祉センター 2F	082-254-2740	毎週金曜日	11:00～15:00
福山市新市町	ガーデンカフェ	福山市新市町56-2 ローカルコモンズしんいち ガーデンテラス	0847-51-2226	毎月土曜日のいずれか	13:00～15:00
福山市草戸町	オレンジカフェくさど	福山市草戸町5-8-24 特別養護老人ホームくさど	084-973-9911	毎月第2日曜日	14:00～16:00
府中市荒谷町	住めば都の…	※ 要問合わせ	0848-61-4410	※要問合わせ	※要問合わせ
三原市城町	認知症カフェ	三原市城町2-2-4 はるのん café	0848-61-4410	毎月第3金曜日	10:00～11:30
三原市城町	認知症カフェ	三原市城町3-6-1 くすのき・めぐみ苑	0848-63-6775	毎月第2木曜日	14:00～15:30
三原市宮浦	認知症カフェ	三原市宮浦1-15-1 三原市医師会病院 西館	0848-63-7100	毎月第1金曜日	13:30～15:30
三原市下北方	認知症カフェ	三原市下北方2-9-1 梅菅園グループホーム 地域交流スペース	0848-86-2450	毎月第4木曜日	14:00～15:30
三原市久井町	認知症カフェ	三原市久井町和草1906-1 久井保健福祉センター	0848-32-5007	毎月第2火曜日	14:00～16:00
呉市焼山南	オレンジカフェ	呉市焼山南1-8-23 呉やけやま病院 外来待合室	0823-33-0511	※要問合わせ	14:00～16:00
広島市安佐南区	オレンジカフェ 火曜てみんさい	広島市安佐南区西原8-33-3 西原セントラルクリニック待合室	082-871-1177	毎週火曜日 (祝日休み)	14:00～16:00

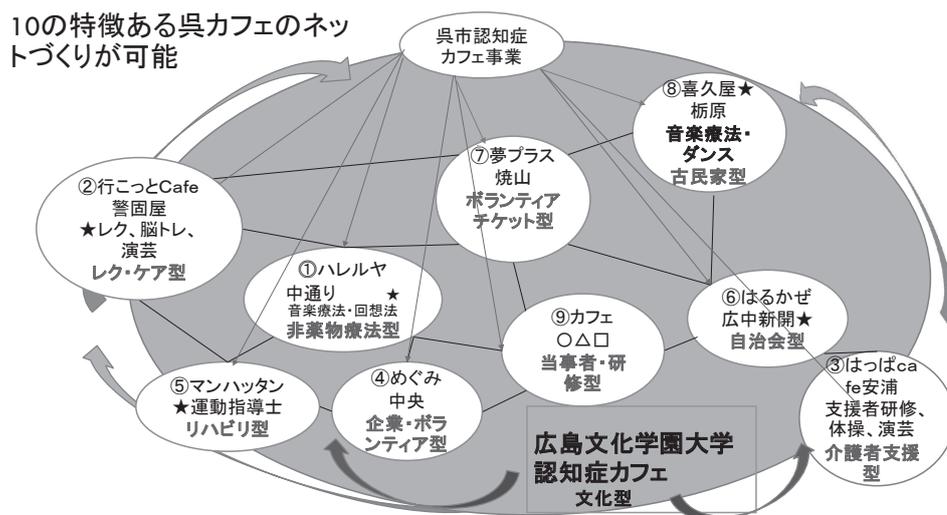
表Ⅱ-2 呉市認知症カフェ見学施設

地区	名称	場所	開催日	時間	連絡先	ボランティア	見学者
中央	ほっと♡カフェ「マッターホルン」	中通り1丁目5番25号	第1金曜日 11月4日	14時から 15時	22-6868	なし 呉市東地域包括見学有	加藤
	めぐみ カフェ デイサービス恵	東中央2丁目8番17号	第3、あるいは第4水曜日 10/26	13時半から 15時半	27-8811	あり 介護職員	加藤・岡田部長
	認知症予防カフェ ハレルヤ	中通4丁目9番17号	第3木曜日 10/20	14時から 15時半	32-5980	あり	加藤
昭和	きてくれサロン 夢プラス	焼山本庄4丁目2番1号	第3土曜日 11/19	11時から 14時	34-0617	あり チケット制	中原
	きてくれ サロン「喜久屋」	栃原町154-2	第2水曜日 11/9	10時から	34-2755	あり	加藤・小田次長
警固屋	行っとこ Cafe 養護老人ホーム呉	警固屋1丁目17番15号	第3金曜日 10/21	13時半から 14時半	28-0901	なし	加藤・小林
広	カフェ△□ デイサービス	広横路2丁目2番18号	第2土曜日 12/10	13時から 15時	74-3360	子どもから大人	加藤
	カフェはるかぜ デイサービスはるかぜ、認知症デイケア、児童デイサービス	広中新開2丁目4番27号 旅行会社コスモス	第1あるいは第3土曜日 11/5	10時から 12時	76-6133	参加者主体 中新開自治会長、元自治会長ほか住民 呉市東地域包括見学有	加藤
安浦	「はっば」カフェ 地域包括支援センター、認知症疾患治療センター	安浦町中央1丁目3番17号	第4土曜日 10/22	13時半から 15時	70-0571	あり 介護経験者	加藤・佐々木

④どんな方も自分のペースに合わせて参加できる場

呉市住人を対象にした場合呉市から一人500円の補助がある。補助とお茶代で運営しているが、持ち出しとボランティアにより成り立っているようである。現在、個々のカフェが独自に展開されており、カフェ間の情報交換や会議体制づくりなどが求められている。呉市事業の9つのカフェと病院のカフェは、呉市内の地域包括や背景の施設と連携している。広島文化学園大学の知的・人的、資源を活用すれば、これらのネットワークをつくっていくことが可能である（図II-1）。

各カフェ訪問時の様子を紹介する。全てのカフェは、月一回の開催。運営は、スタッフとボランティアによる運営で、飲食の実費を徴収している。



図II-1 広島文化学園大学と呉認知症カフェ事業とのネットワーク図

1. 呉市内認知症カフェ訪問調査

1) 行こっと Café：社会福祉法人が呉清光園に開設する「行こっと Café」は月1回（参加費50円）、間違いさがしや計算などの頭の体操、ずんどこ節の体操、風船運び、コーヒーとお菓子の休憩時間で、約1時間の行事である。講演、脳トレ、園芸などを中心としたレク・ケア型といえる特徴を備えている。安心安全のため利用者13人に対し3名のスタッフが対応（社会福祉士、相談員、看護師）し専門職の人員を擁していた。訪問日には、高齢者のみなさんは、スマホや携帯で、情報を収集し対処していたのには驚いた。中には、フラダンスを習っておられるほど元気な方がいらした（表II-3）。

2) ハレルヤ：社会福祉法人政樹会 呉ベタニアホームがもっとも古くからカフェを開催している。本ホームは、キリスト教の愛で仕えたいという祈りとミッションを持って設立されたところで、ホームページにもその様子を掲載している。カフェでは、はじめに、音楽講師が、キーボードを弾きながら、楽しく季節の歌を歌ったり、発声をして呼吸機能を回復するようなプログラムや、回想法の説明をして、エビデンスに基づき提供していることを説明された。利用者には、「認知症カフェ」じゃない、「認知症予防カフェ」と、言葉にこだわって使っている方々が見られた。回想し、懐かしい思い出をテーブルで話し合ったり、プレゼンテーションをしたり、感情豊かに表出する場が作られている。近所の方が多く夫婦で参加されている方もいた。認知症予防の、たとえば、「えごまトースト」など簡単な食べ物や飲み物をとってお話をして一日をしめくくり、各自住まいに歩いて帰って行かれた。町中のカフェにあって、皆さんおしゃれして参加されていた。

カラフルなテーブルやいすに工夫があり、座りやすく転倒防止などバリアフリーの配慮がなされている。治療法のエビデンスを重視していた。（仮称；非薬物療法型）

表II-3 認知症カフェ（行こつとCafé）調査項目

調査日：10/21 訪問者：加藤、小林

カフェの名称	行こつとCafe
所在地	呉市警固屋1-17-15
対応者	社会福祉士 神垣 智之
運営母体	1. 家族会など 2. 社会福祉法人 3. 市町村 4. NPO法人 5. 診療施設 6. その他()
運営費用	年間 約 万円
資金源	1. 自己資金 2. 参加費 3. 財団などの助成金 4. その他()
カフェの場所	1. 個人の家 2. 公民館など公共の施設 3. 病院付属施設 4. その他(呉清光園)
カフェの目的	認知症予防と地域の高齢者の交流
開催頻度	1. 週 回 2. 月 1 回 3. 年 回 4. その他()
開催時間	1. (13時半)時～(14時半)時まで
食事	1. 持参 2. 施設が提供 3. その他(なし)
参加費	1. 無料 2. 1人1回 50 円 3. その他()
参加者	人数:1回約 ~ 13 人。男女比:2対11 年齢層:60歳代から80歳代 内訳:
ADL	1. 家にももっている 2. 散歩にてかける 3. 買い物に行く 4. ボランティア活動をする 5. その他()
知的活動	1. 認知症の程度:軽度もしくはなし
交通手段	1. 自分で 2. 家族に連れられて 3. 施設の送迎バスなど 4. その他()
スタッフ	1. 家族会のメンバー 2. 市民ボランティア 3. 認知症サポーター 4. 専門職(看護師、介護士、作業療法士、医師など) 5. その他()
ネットワーク	1. 社協 2. 地域包括支援センター 3. 医師会 4. 民生委員 5. 老人会 6. その他(シルバーハウジング)
実施内容	間違えがしや計算などの頭の体操、ずんどこ節の体操、風船運び、コーヒーとお菓子の休憩時間
効果、課題など	はっきりした効果判定は現時点では行っていないが、出席者は自宅に引きこもらず自ら交流をもとめ行動でき、とても明るくアクティブである。
認知症カフェの必要性・課題などについて	施設内のカフェのため便利が悪く、歩いてこれる範囲のしか参加できない。安心安全のため利用者13人に対し3名のスタッフが対応(社会福祉士、相談員、看護師)し専門職の人員を要していた。もっとボランティアの育成、協力が必要なのは。
看護学部が設置・運営することの特徴・意義などについて	まずボランティア育成のため協力者を地域から募り、養成講座を開催しスタッフを育成することができれば長続きし地域に根ざしたカフェになるのではなかろうか。

3) はっば café 安浦：呉・江田島認知症疾患医療センターにおいて、かねてより計画中であった認知症カフェが、安浦地区で始動した。川尻安浦包括支援センターに隣接している。本カフェは、認知症介護支援カフェ「はっば(88)カフェ」として、家族介護者のための認知症カフェとして開催しており、研修会、介護予防、相談なども行っている。クリスマス、しめ縄づくりの提案など季節の行事を取り入れ、楽しみを持たせている。ウェルカムボードや飾りつけから、おもてなしの気配りがされていた。介護の悩みや、今後について、社会資源について情報収集できる。(仮称：介護家族支援型)

4) めぐみ：設置母体は、企業であり、デイサービスセンター、ショートステイめぐみ園が主催している。利用者が男性が他より多いのも特徴の一つ、認知症の家族の会の方と職員ボランティアで行われ、情報交換の場となっている。当事者の方も参加している。運動会など施設の行事も盛んに行われ、希望があればデイサービスやショートステイに繋がっている。(企業・ボランティア型)

5) マッターホルン：地域の介護予防教室や、近隣の中高生の部活動に理学療法士を派遣したり、「きてくれサロン」(介護予防、機能訓練)、「呉市高齢者筋力向上、トレーニング事業」などにも積極的に協力し社会貢献している。認知症カフェは、リハビリテーションチームの運動指導士が運営し、リハビリとコミュニケーションを中心としたカフェ。参加者の一人は、自宅で、暗いうちから洗濯や食事をすませ、受診、リハビリやショッピングをしたり、認知症の予防のためにカフェに通っているという。主催者の話では、戦争時代、勉強が十分できなかったため勉強へのニーズが高い、一方、参加者が少ないことが悩み、現在、認知症の方がいないので、重度の認知症の方が迎えられるように工夫したいと課題を話された。(仮称：リハビリ型)

6) はるかぜは、デイサービスセンターはるかぜが開設している。設置の母体は、旅行会社で、デイサービスと認知症デイサービス、児童のデイサービスが併設されている。デイサービスは、道の駅のような雰囲気、毎月どこかの観光地が再現されており楽しい場である。はじめは、認知症カフェに対して、自分たちは、まだお世話にならなくてもよいというような雰囲気があったが、自治会に加入してい

ただい地域の方と親しくなるにつれ、参加者が増えていった、と工夫を聴くことができた。活動の様子は、自治会が自主的にカフェを開設し、自治会長や地域住民が会話やカラオケを提供している。このように、はるかぜは、自治会員としての役割を果たし、地域に親しまれるカフェとなっている。子どもさんの小学生の頃に話が及んだり、同じ時代を共に過ごした方々ならではの場が存在している。最近、引きこもりがちになっていたが、誘われてきてみたら楽しかった。きてよかったと、居場所づくりと引きこもり防止に役立っている。(仮称；自治会型)

7) 夢プラス焼山：デイサービスセンター(夢)は、団地の中に黄色い建物が目をひく。参加者は、友人からの紹介や口コミで、「みんなでわきあいあい暖かい食事ができる」と聞いて楽しみに参加、「別なところに行っていたが、楽しく食事する、手造りの食事が魅力」と話していた。「参加者と共にどんな活動がよいかなど考えていける。血压測定や温泉足浴も楽しみの一つ。」何か課題や提案があれば、すぐに机を囲んで当事者もボランティアスタッフも一緒になって話し合いの場を持っている。運営にボランティアが参加し、ポイント利用制度を考えている。広い団地で坂道ではあるが送迎がついている。

今後の継続は、職員だけでやるには、限界があること。ボランティアや学生の協力が欠かせない。ボランティアも無償でなく何か続けることを考えていく必要がある。マンパワーの課題。食べることは大事にしたい。(仮称：ボランティアチケット型)

8) 喜久屋：焼山の緑の中に、雰囲気の良い外観にも目をひく。立派な古民家で活動には十分な広さがあった。きんさいカフェの参加者と当事者の参加があり、30人程度の高齢者が集っていた。音楽療法、楽器演奏、タップダンス、着せ替えゲーム、脳トレと様々なアプローチで脳を活性化している。ゲーム感覚で、間違えても笑ってすごせる。楽しいカフェと楽しいお茶の時間がありプロフェッショナルな介入であった。背景は、幼稚園から特別養護老人ホームまであり、幼児との交流や地域の一人暮らしの方との食事会なども行い、地域貢献している。(仮称：古民家、音楽・ダンス活動型)

9) ○△□：デイサービスまる・さんかく・しかくがボランティアと共に運営している。となりには、キッチンまる・さんかく・しかくもあり、古いなつかしい食器にお膳、手作りのおふくろの味を楽しむこともできる(表Ⅱ-4)。川沿いの広い道路から小道に入り、なんとなく、家に帰ったように感じさせる。全体を古民家調に改装し、あたたかな光が差しなんと昔懐かしい雰囲気を感じる事が出来る。認知症の当事者と家族、当事者を中心としたカフェであった。12月には、サンタクロースやとなかいを制作したり、1月には、ふくわらい・はごいた、おみくじなど活動に工夫を凝らしていたり、懐かしい話をして回想したり、みんなで一緒にわきあいあいと過ごす。会が深まっていくうちに、会話が多くなり、笑顔も多くみられるようになった。

当事者等の講演や介護家族の想いも自然に話されているなど研修にも工夫がみられた。ボランティアに子どもさんが参加し、家庭的な雰囲気が味わえる。送迎があり、通いやすい。(仮称：当事者研修型)

10) やまカフェ：呉やけやま病院内の認知症カフェ「やまカフェ」は、職員の応募から名づけられました。内容は、「認知症について」、「社会資源について」、「精神科リハビリテーションについて」などのテーマで勉強会を中心に行い、また栄養士による「食事拒否の原因と対策」など講義と質問コーナーも設け、軽食と喫茶で話し合う場を提供している。また、認知症デイケアや施設の見学もできる。男性の方が多く通所している。病院の玄関を入ると、ボランティアスタッフや病院の職員があたたかく迎え、研修会会場は、パワーポイント・マイクなど設置され学習環境が整えられていた。

医師、精神保健福祉士、ケアマネージャー、栄養士、看護師等の専門職が多数参加しており、あらゆる質問に対応できる。

手作りのカップや、コースターで親しみやすくおもてなしてくれ、明るい場所をつくっていた。はじめて参加のご夫婦も「精神科病院だけど、とても親しみやすく来てよかった。心配なことも相談できました。」と、自ら体調不良や引きこもりになりそうだったので良かったと話された。

地域に親しまれる精神科病院、認知症疾患に対する知識普及と相談所としての役割を果たしていた。(仮称：病院学習型)

表II-4 認知症カフェ（カフェ○△□）調査項目

調査日： 12月10日（土） 訪問者：加藤・林

カフェの名称	カフェ○△□
所在地	呉市広横路2-2-18
対応者	通所介護管理者 生活相談員 介護福祉士 沖原 富子
運営母体	1. 家族会など 2. 社会福祉法人 3. 市町村 4. NPO法人 5. 診療施設 ⑥その他(労働・センター事業団 ぐらしのサポート まる・さんかく・しかく)
運営費用	年間 約 万円
資金源	①自己資金 2. 参加費 ③財団などの助成金(呉市) 4. その他(出資金)
カフェの場所	1. 個人の家 2. 公民館など公共の施設 3. 病院付属施設 ④その他(デイサービス施設)
カフェの目的	3つの大目的: 社会交流の場・認知症啓発・家族へのサポート
開催頻度	1. 週 回 ②月 回 3. 年 回 4. その他()
開催時間	1. (13)時～(15)時まで
食事	1. 持参 2. 施設が提供 3. その他()
参加費	1. 無料 ②1人1回 150 円 3. その他()
参加者	人数:1回約 10人 前後 12/10 男女比: 2対7 男性<女性 年齢層: 60～90 歳 内訳: 認知症4名・ひとり暮らし3名(内: 脳梗塞退院1ヵ月後介護認定申請中1名・妻を介護していた1名)・家族と同居2名・夫婦1組(妻が認知症)
ADL	1. 家にこもっている 2. 散歩にでかける 3. 買い物に行く 4. ボランティア活動をする 5. その他()
知的活動	1. 認知症の程度:
交通手段	①自分で ②家族に連れられて ③施設の送迎バスなど 4. その他()
スタッフ	1. 家族会のメンバー 2. 市民ボランティア 3. 認知症サポーター ④専門職(看護師、介護士、作業療法士、医師など) 5. その他(スタッフのこども)
ネットワーク	①社協 ②地域包括支援センター ③医師会 ④民生委員 ⑤老人会 ⑥その他(ふたば病院: 居宅介護事業所おりはしさんからの提案 9月のアルツハイマーデー 広地域で集う場を考えてる)
実施内容	認知症予防のための学習・相談: デイのレクリエーション、健康体操 今回は「認知症対応型通所介護について」尾居屋、新田一華CMの講話後、意見交換。今の困りごとや体験談などを話し、みんなで共有。 コーヒーレイク(ケーキセット)その後、折り紙でサンタクロース・トナカイを作成。今日の一言をメモに記録。
効果、課題など	4月から地域密着型に移行し、地域運営会議の場でデイケアを知ってもらうことができ、自治会から回覧の利用を勧められ、現在は利用している。 民生委員や地域の方が気軽に来られるが自治会長はまだ来られていない。 ボランティアの参加もあるが、内容により参加者の幅がある。参加者は固定される。場所が分かりにくい。交通の便が悪い。駐車場は11台確保している。
認知症カフェの必要性・課題などについて	家で介護されているので、本人への支援ももちろんであるが家族のストレス発散の場や学習の場が必要である。 高齢者の参加が難しく、家族へのサポート体制の在り方が課題である。
看護学部が設置・運営することの特徴・意義などについて	看護の専門を活かしたストレス発散の方法や回想法など、介護者へのケアや学習の場の提供が必要だと考える。 若者からのエネルギーは高齢者に影響があると考え。高齢者と20代の若者の交流からお互いに何を必要としているのか、語り合うこと、コミュニケーションの取り方など自分たちがどのように高齢者と接していくことが大切なのかを学ぶ機会になる

2. 広島市認知症カフェ訪問調査報告

1) 山崎病院ぬくぬくカフェ

山崎病院ぬくぬくカフェは昨年開設し、1年半になる。山崎病院の屋上に開設しており、病院からの認知症者の参加と一般の参加がある。スタッフも、病院からの看護師、理学療法や地域委包括支援センターの職員、一般ボランティアで構成されている。やはり病院の特徴が活かされている(表II-5)。

イベントの内容も豊富で、手芸、フラダンス観賞、カフェ、ハンドマッサージ(家族のアイデア)、お茶会、ハーモニカ演奏会などを行ってきているように、毎月違ったイベントが企画されている。この日は認知症者によるデコスイーツ飾り付け教室が行われていた。出入り自由と参加者が自分の手を動かして参加できるようにしているのが特徴である。その企画立案、準備にスタッフは相当の労力を費やしている。

主催者の話では、「カフェに行って他の人と話をするのが楽しみ」、「参加者の表情がちがう」、「また行きたいと自分から積極性を示す」などの参加者の積極性が伺えるとのことである。また、自分で来られない方(玄関を出て行先が分からない方)は包括支援センター職員が迎えに行く、病院の屋上で行われるので、音などを聞いて周辺の方が来られるので出入り自由になっている、若い人たちとのふれあいが喜ばれるので病院スタッフの子供たちと一緒にいることがある—という方針で行っているとのことであった。広島文化学園大学の学生たちの参加が可能かどうか尋ねてみたところ大いに歓迎とのことであったので、いつか学生を連れていきたいと考えている。

2) 認知症カフェ(清水薬局)

H27年より開設、毎月1回、16回目となる。薬局が主催する認知症カフェは全国に何件かあるが、広島県では現在まで唯一である。ここでは、認知症ミニ講座、認知症予防コーナー、認知症サポーターの

表II-5 認知症カフェ（ぬくぬくカフェ）調査項目

調査日：H27年9月24日 訪問者：土肥、森田	
カフェの名称	ぬくぬくカフェ
所在地	732-0032 東区上品1丁目24-9 山崎病院
対応者	穴戸美由貴 看護部部长、橋奥邦子 看護部課長・介護支援専門員、福田知枝 主任介護支援専門員・広島市認知症地域支援推進員
運営母体	1. 家族会など 2. 社会福祉法人 3. 市町村 4. NPO法人 〇5. 診療施設(山崎病院) 6. その他()
運営費用	年間 約 万円(全て病院負担)
資金源	1. 自己資金 2. 参加費 3. 財団などの助成金 4. その他(病院負担、参加費不要)
カフェの場所	1. 個人の家 2. 公民館など公共の施設 〇3. 病院付属施設(病院屋上屋内、屋外に施設) 4. その他()
カフェの目的	介護者と職員が地域の認知症の方と家族を対象に自宅で介護をしている皆様の思いや不安を聞き在宅介護のサポート、悩み事の相談や助言を通して地域の皆様と向き合う活動として行っている。
開催頻度	1. 週 回 2. 月1回(毎月第4土曜日) 3. 年 回 4. その他()
開催時間	1. J(10)時~(11:30)時まで
食事	1. 持参 2. 施設が提供 3. その他(不要、午前中で終了)
参加費	〇1. 無料 2. 1人1回 円 3. その他()
参加者	人数:1回約10~30人。男女比:女性が多い 年齢層:70歳以上 当日(7)名
ADL	1. 家にももっている 2. 散歩にでかける 3. 買い物に行く 4. ボランティア活動をする 〇5. その他(自分で来られる~迎えを要するまで色々)
知的活動	1. 認知症の程度:種々
交通手段	1. 自分で 2. 家族に連れられて 3. 施設の送迎バスなど 4. その他(自分で来られる~包括支援センター職員に連れられて)
スタッフ(7名)	1. 家族会のメンバー 〇2. 市民ボランティア 3. 認知症サポーター 〇4. 専門職(〇看護師、介護士、〇理学療法士、医師など) 5. その他()
ネットワーク	1. 社協 〇2. 地域包括支援センター 3. 医師会 4. 民生委員 5. 老人会 6. その他()
実施内容	昨年開設し、1年半になる。10月からモデル事業に。広報は地域へ企画のチラシ配布する。出入り自由なので参加者名簿は作っていない。今日の企画は“ホップでキューなデコスイーツ”(飾りたい素材にアクリルクリームを塗る。②飾りたいものを自分の好きなようにのせる。③飾り付けが終わったらホールケースの中に入れて乾かす。自分の意志で自分でしたいようにすることを尊重している。素材は100円ショップ、手芸品店で購入。がすくない。これまでフランス観賞とカフェ、ハンドマッサージ(家族のアイデア)、お茶会、ハルモニオ演奏会などを行ってきた。
効果、課題など	カフェに行ったら他の人と話をするのが楽しみ、表情がちがう。また行きたいと自分から積極性を示す。自分で来れない方(玄関を出て行先が分からない方は包括支援センター職員が迎えに行く。病院の屋上で行われるので、音などを聞いて周辺の方が来られる。出入り自由になっている。若い人たちのふれあいが喜ばれるので病院スタッフの子供たちと一緒にいることがある。広島文化学園大学の学生さんたちの参加が可能かどうか尋ねてみたところ大いに歓迎とのことだったので、いつか学生を連れていきたいと考えている。
認知症カフェの必要性・課題などについて	広島県に現在21か所開設している(広島県が力をいれている)。さらに地域から手をあげた4か所立上げ準備中。課題は、マンパワーと費用とやり方。いかにして認知症の方の理解を得るか、家族のかたの理解を得るか、地域を巻き込むことが必要(地域包括支援センターの話)。
看護学部が設置・運営することの特徴・意義などについて	本学部は看護学部であり、認知症看護強化コースを設けて認知症看護のスペシャリスト育成基礎づくりを行っているという特色がある。本コースの指導教員と学生を中心とし、地域を巻き込んだ形が他に類をみないカフェとなり得ると思われる。学生にとっても認知症の方、家族の方と接することにより多くのことを学ぶことができるという教育的効果も期待できる。

表II-6 認知症カフェ（清水薬局）調査項目

調査日：H29年3月11日 訪問者：土肥敏博	
清水薬局	清水薬局 認知症カフェ
所在地	広島市佐伯区菜々園2丁目2-13
対応者	山下大介 薬剤師(認知症ケア専門士、在宅医療事業マネージャー) 植村恵理子(中村病院看護師、認知症ケア専門士)
運営母体	1. 家族会など 2. 社会福祉法人 3. 市町村 4. NPO法人 〇5. 診療施設(清水薬局) 6. その他()
運営費用	年間 約 万円 今年度は広島市のモデル事業費半期25万円、それまでは施設より
資金源	1. 自己資金 2. 参加費 3. 財団などの助成金 4. その他(5参照)
カフェの場所	1. 個人の家 2. 公民館など公共の施設 3. 病院付属施設 4. その他(清水薬局待合室)
カフェの目的	認知症の人を外に出す、家族の方の相談、高齢者の集い
開催頻度	1. 週 回 2. 月1回 3. 年 回 4. その他()
開催時間	1. J(14)時~(17)時まで
食事	1. 持参 2. 施設が提供 3. その他(コーヒー、紅茶、お茶、お菓子を用意、好きなだけおかわり提供、職員が接待)
参加費	〇1. 無料 2. 1人1回 円 3. その他()
参加者	人数:1回約5人(雨の日) ~ 20人。男女比:ほとんど女性、男性はいても1人 年齢層:70歳以上 内訳:今回は11人の参加、全員女性、認知症の人はいない。
ADL	1. 家にももっている 2. 散歩にでかける 3. 買い物に行く 4. ボランティア活動をする 5. その他()
知的活動	1. 認知症の程度:軽度、ほとんどの人は健康高齢者
交通手段	〇1. 自分で 〇2. 家族に連れられて 3. 施設の送迎バスなど 4. その他()
スタッフ	1. 家族会のメンバー 2. 市民ボランティア 3. 認知症サポーター 〇4. 専門職(看護師、〇介護士、作業療法士、医師など) 5. その他(薬剤師、地域包括支援センター)
ネットワーク	1. 社協 〇2. 地域包括支援センター 3. 医師会 4. 民生委員 5. 老人会 6. その他()
実施内容	H27年より開設、毎月1回、16回目となる。薬局が主催する認知症カフェは全国に何件かあるが、広島県では最初。参加者は自由に立ち入り、胸にネームカードを貼る。 1. 本日は、自由に団らん、途中から、看護師3名、介護士2名、薬剤師3名が話に加わる(約1時間)。 2. 山下薬剤師より、認知症初期症状の講座(約20分) 3. 最後は、デイサービスのの方の、認知症予防体操と一緒に(背中をお互いにさすりあう*ヒーリングタッチ?腕、首、足を動かす、特別な体操ではない)2時間で終了 4. 特別な催しものとして、お茶会を催す:このときは参加者は多い
効果、課題など	はじめての参加者に話を聞くと、一人でいると不安なので来た、ここへくると安心である。また参加したい。 男性はほとんどいない。
認知症カフェの必要性・課題などについて	認知症のことについて講座をひらき正しいことを知ってもらう。症状に早く気づくことが大切で、その役割をはたす。 看護師の立場から助言する。施設関係の支援が必要な場合は、地域包括支援センターの人が対応、薬のことは薬剤師が対応する形は効果的。こうしたサポーターとの連携をうまく構築することが大切である。
看護学部が設置・運営することの特徴・意義などについて	認知症カフェは、どこでも参加者が楽しく集う場を目的としており、そこに参加することで不安を解消することが有意義、そして参加することにより何かプラスになることがあれば長続きする。本学事業では客観的データをとる必要があるため、参加者の意思を損なわない様に行わないとうまいかない。特に高齢者が多いので、肉体的な運動制限を伴っている人が多いので、注意が必要である。ミナト・メディカルコンサルティング合同会社と連携するのも良い。

集い、介護個別相談会を謳っている（表Ⅱ-6）。

参加者は自由に立ち入り、胸にネームカードを貼る。

- ・自由に団らん、途中から看護師3名、介護士2名、薬剤師3名が話に加わる（約1時間）。
- ・山下薬剤師より、認知症初期症状の講座（約20分）
- ・最後は、デイサービスの方の認知症予防体操を一緒に行う（背中をお互いにさすりあう、腕、首、足を動かす、特別な体操ではない）。2時間で終了。
- ・特別な催しものとして、お茶会を催すことがありこのときは、参加者は多い

本カフェでは、それぞれの専門家が、認知症の講座をひらき認知症の早期発見、治療と予防、必要に応じて介護相談、看護師の立場から助言、薬剤師による服薬指導、施設関係の支援が必要な場合は、地域包括支援センターの人が対応、デイサービスから運動の指導をするという形は有効に機能している。ポスター作成、広報と費用の負担は施設が担当とバックアップ体制も整っている。こうしたサポーターとの連携をうまく構築することが大切である。

3. 北九州市の認知症カフェ訪問調査報告

1) 「カフェ・オレンジ」「オレンジカフェふれあい」「カフェ DE いきいき」「カフェぽっぽ」の4か所を見学した。詳細は、認知症カフェ調査項目票をご参照されたい（表Ⅱ-7～Ⅱ-10）。

(1) 4か所に共通と思われた点

- ・もともと地域に根差した活動が根底にあって、それに支えられて認知症カフェが開催されていた。
- ・多くの参加者間の活発な交流や相互に信頼関係があった。
- ・参加者は、認知症の方に限らず、高齢者・家族や支援者としての行政関係者など様々であり、年齢層にも幅があった。
- ・主催者は、そのような立場や年代の違った参加者の中で自然と発生する見守りや支え合い、相談を大切にしていた。
- ・スタッフの職業はカフェによって様々（ボランティア・医院職員・介護施設職員など）だったが、認知症理解のための講座などへ参加した人、もともと専門職であった人や現在専門職で、認知症に対する一定の知識を持った人達で対応していた。
- ・これらスタッフの方からは、「地域を意識し、自らも地域の住人であるという思いで参加している」、「将来の不安を持っているのは自分たちも同じである」という発言が多く聞かれた。何かを提供するというより、共に悩んで考えていくという姿勢に共通点があった。

(2) 北九州市認知症カフェの特徴的と思われた点

- ・「カフェ・オレンジ」は、北九州市との共同で認知症カフェの拠点、まとめ役となる役割を持っている。本来、認知症当事者・家族に対する地道な活動を経て現在があり、このような団体がまとめ役の一翼を担うことに大きな意味があると思われた。当事者と行政という異なる目線からどのようなものが生み出せるか、大変興味深い。また、カフェ来所者への対応を行うカフェマスターの養成を組織的に行っていることは、意義深い。地域住民の中に、認知症への理解者が段階的に増えていくという意味でも必要な取り組みであると思われた。
- ・「オレンジカフェふれあい」では、運営をサポートするボランティアが、いくつかのグループに分かれて、自然発生的にカフェ開催日には担当グループによる自主的な料理の持ち寄りが行われていた。それを参加者全員で弁当として盛り付け、一緒に食べることからカフェが始まる。食事や茶菓を共にいただくことは、コミュニケーションの始まりとして、大変効果的であると感じた。「本当は、参加者と一緒に食事を作りたい。そうすれば更にお互いの距離が近くなるのだが、スペースと時間がない」と主催者は話していた。このカフェでは、野村氏の強力なリーダーシップがカフェを牽引している。
- ・「カフェ DE いきいき」で重度の認知症の方々が、スタッフとして働いていた。働くことや役割を持つことで、その人らしさや生きがいなどを再確認できる取り組みであると思われた（収録されたDVDを拝見した）。またこのカフェでは、運営や事業計画において、他のカフェの中で1番、自然でゆったりとした取り組みがなされていた。主催者側が何かを生み出すというより、参加者のニーズが先にあり

表II-7 認知症カフェ（オレンジカフェ カフェDE いきいき）調査項目

調査日：平成29年1月23日（月） 訪問者：大塚・山川（介護プラス）

カフェの名称	オレンジカフェ カフェDE いきいき(28年3月オープン)
所在地	〒807-0835 北九州市八幡西区東折尾超16-10
対応者	株式会社 いきいき 部長 城田浩太郎氏(認知症ケア上級専門士・認知所為介護指導者・介護支援専門員・介護福祉士)
運営母体	1. 家族会など 2. 社会福祉法人 3. 市町村 4. NPO法人 5. 診療施設 ⑥その他(株式会社いきいき)
運営費用	年間 約 万円 開始時10万円、その後は開催ごとに1万円程度施設より。参加者1人100円徴取のため持ち出しのほうが多い。
資金源	1. 自己資金 2. 参加費 3. 財団などの助成金 ④その他(株式会社いきいき より)
カフェの場所	1. 個人の家 2. 公民館など公共の施設 3. 病院付属施設 ④その他(運営施設の一部屋を活用)
カフェの目的	認知症者の役割を理解し社会とつながる・認知症者と家族や地域の誰でもが参加し交流できる・地域の人が認知症やケアを知り安心して相談や利用ができる
開催頻度	1. 週 回 ②月 1 回 3. 年 回 4. その他()
開催時間	1. (13時半) ~ (16) 時まで
食事	1. 持参 2. 施設が提供 3. その他(コーヒーとデザートを提供) デザートは職員手作り
参加費	1. 無料 2. 1人1回 100 円 3. その他()
参加者	人数:1回約 30 ~ 40 人。男女比: 女性の参加が多い(男性は4~5名程度) 年齢層:高齢者中心だが、見学者なども多く様々
ADL	①家にこもっている ②散歩にでかける ③買い物に行く ④ボランティア活動をする ⑤その他(施設で介護を受けている)
知的活動	1. 認知症の程度:重度から認知症なしの方まで様々
交通手段	①自分で ②家族に連れられて 3. 施設の送迎バスなど ④その他(隣接する施設から)
スタッフ	①家族会のメンバー 2. 市民ボランティア 3. 認知症サポーター 4. 専門職(看護師、介護士、作業療法士、医師など) ⑤その他(認知症者本人)
ネットワーク	1. 社協 ②地域包括支援センター 3. 医師会 ④民生委員 ⑤老人会 ⑥その他(町内会長・地域住民)
実施内容	グループホームいきいき良花居(よかとこ)・小規模多機能型居宅介護いきいき倶楽部を運営している株式会社の実施。2か月に1度の開催から月1度の開催へ移行(29年1月から)。開催の案内は町内会長など地域の関係機関にも配布するが、事前申し込み・動員・集客は負担になるため行わない。基本的にイベントは何も行わず、気軽にきて気軽に帰るスタンス。ごく自然に人が集まってお茶を飲んで話す。
効果、課題など	認知症のかなり重い人もスタッフとして働いている。日常の中での役割は限られるため、非日常的空間としてこのカフェで役割を持ってもらう効果は大きい。スタッフはおそろいの制服にバッジをつける。このことが自覚を促す一助となっている。地域や住民に開かれた施設をさらに目指し、気軽に相談でき集まれる場所を提供していく。ゆっくりとした対応を心掛けている。(参照:TVのニュースで紹介されたDVDあり)
認知症カフェの必要性・課題などについて	男性の参加(よく来る男性は4~5人くらい、自分で来所できる) アンケートで希望を収集し、プランに加えていく
看護学部が設置・運営することの特徴・意義などについて	何かを与える、ここに来たいということがあるというスタンスでは、人は来てくれないのではないかと助言があった。一緒にゆっくりと考えることを大切にしており、特に来所者の強みを生かすことで大きな成果を上げていると思われた。まだ認知症と診断されていない方々も含め、住民は近い将来の不安を持っている。さりげないサポートを地域の中でやっている存在であり、何でも相談できる雰囲気作りが重要。

表II-8 認知症カフェ（オレンジカフェ ふれあい）調査項目

調査日：平成29年1月15日（日） 訪問者：大塚

カフェの名称	オレンジカフェ ふれあい
所在地	〒802-0975 北九州市小倉南区徳力団地2-2 3号室
対応者	有限会社故郷 ふれあい家族 代表取締役社長 野村 美代子氏
運営母体	1. 家族会など 2. 社会福祉法人 3. 市町村 4. NPO法人 5. 診療施設 ⑥その他()
運営費用	年間 約 不明 万円
資金源	①自己資金 ②参加費(300円) 3. 財団などの助成金 4. その他(料理などの持ち寄り)
カフェの場所	1. 個人の家 2. 公民館など公共の施設 3. 病院付属施設 4. その他(「デイサロンよっといで」の場所を活用)
カフェの目的	認知症の方にかぎらず、地域で住民同士が支え合う仕組みづくり
開催頻度	1. 週 回 ②月 1 回 3. 年 回 4. その他()
開催時間	1. (11) 時 ~ (15) 時半 まで
食事	1. 持参 2. 施設が提供 ③その他(その日の当番が持ち寄った料理を認知症カフェで弁当に詰める)
参加費	1. 無料 ②1人1回 300 円 3. その他()
参加者	人数:1回約 20 ~ 30 人。男女比: 男性参加は1人のみ 年齢層: 50~90代 内訳:当日は参加者23人。自立高齢者5人 認知症のある方5人(うち介助が必要3人) その他ボランティアなど13人
ADL	1. 家にこもっている 2. 散歩にでかける 3. 買い物に行く 4. ボランティア活動をする ⑤その他()
知的活動	1. 認知症の程度: 軽度から中度
交通手段	①自分で ②家族に連れられて 3. 施設の送迎バスなど ④その他(入所施設職員と一緒に来所)
スタッフ	①家族会のメンバー ②市民ボランティア 3. 認知症サポーター 4. 専門職(看護師、介護士、作業療法士、医師など) 5. その他()
ネットワーク	1. 社協 2. 地域包括支援センター 3. 医師会 4. 民生委員 5. 老人会 6. その他()
実施内容	受け付けは高齢者の方々。計算などおぼつかないはあるが、丁寧に対応される。各テーブルに5人ほどで6テーブルに座る。参加したボランティアが、持ち寄った料理を弁当として盛り付けたりお茶をいれたりなどを皆で行う。その後全員で会食。近況報告。記憶の定かでない方々も、遠慮がちなはあるが嫌がなく、短いが興味深い話をされた。質問もあり楽しそうに返答も。歌を歌う(一月一日・風の歌など)。野村さん指導により漢字しりとりや指体操などを各テーブルで協力して行う
効果、課題など	ここに来たら安心する。楽しいとの発言が、認知症の方たちからも聞かれ、感謝の気持ちや述べられた方が多かった。参加しているボランティアは、この認知症カフェだけではなく様々な活動を行っている人たちで、高齢者や認知症の方々への対応は慣れている。一緒に弁当を詰めたりお茶を入れたりなど、できることを皆で行う和気藹々とした雰囲気がある。ボランティアからも、さらに高齢になった時の不安があり、地域や皆さんと繋がりたいという発言が多く聞かれた。野村さんは、カフェ・オレンジ・草の根ネットワークなど多くの活動に長く関わっており、地域に根差した試みを更に広げたいとの意気込みがある。
認知症カフェの必要性・課題などについて	主催者の野村さんは、取締役社長として、グループホーム・デイサービス・有料老人ホームなどの経営にかかわってこられたが、地域に根差した地域住民主体の活動が今後さらに必要であると考えている。認知症のありなし関係なく、一人の人として地域で生きていくことを皆で支え合うことの重要性を話された。
看護学部が設置・運営することの特徴・意義などについて	野村さんのもと看護師、病院の専門職も地域に出て活躍が求められる時代である。大学からも積極的に地域に出て住民や多職種と交流することで、多くの示唆が得られると助言していただいた。

表Ⅱ-9 認知症カフェ調査項目

調査日：平成29年1月6日（金） 訪問者：大塚

カフェの名称	カフェ・オレンジ 北九州市認知症カフェ拠点モデル(平成28年5月7日オープン)
所在地	〒802-8560 北九州市小倉北区馬借1-7-1総合福祉センター(アシスト21)5階認知症支援・介護支援センター内
対応者	中村真理子氏(保健福祉局地域福祉部認知症支援介護予防センター地域活動コーディネーター・認知症草の根ネットワーク事務局)
運営母体	① 家族会など 2. 社会福祉法人 ③ 市町村 ④ NPO法人 5. 診療施設 ⑥ その他(医師会・歯科医師会・薬剤師会との連携団体)
運営費用	年間 約 200万円(行政から)ただし、平成29年度まで。茶葉代は寄付やNPO法人の自己資金も活用
資金源	① 自己資金 ② 参加費 3. 財団などの助成金 ④ その他(行政・寄附など)
カフェの場所	1. 個人の家 ② 公民館など公共の施設 3. 病院付属施設 4. その他()
カフェの目的	認知症の人とその家族・地域住民・専門職等の誰もが参加し集う場。 認知症の人だけの場所ではなく、多様な年代の方の参加で、認知症を身近に捉え、様々な支援があることなどを知らせてもらう。
開催頻度	1. 週 回 2. 月 回 3. 年 回 ④ その他(毎日 お盆正月の計9日を除く)
開催時間	1. (10)時～(18)時まで
食事	1. 持参 2. 施設が提供 ③ その他(茶葉のみ提供 食事は提供していない 弁当は持ち込みOK)
参加費	① 無料(寄付箱あり) 2. 1人1回 円 3. その他()
参加者	人数:1回約 ～ 人 男女比: 年齢層: 内訳:約7ヶ月で約10300人来所・視察も。引きこもり・難病・認知症・隣接する市立病院外来患者・学生・大学教員など。年齢層も様々。
ADL	① 家にこもっている ② 散歩にでかける ③ 買い物に行く ④ ボランティア活動をする ⑤ その他()
知的活動	1. 認知症の程度:認知症のあるなしにかかわらず
交通手段	① 自分で ② 家族に連れられて ③ 施設の送迎バスなど ④ その他()
スタッフ	1. 家族会のメンバー ② 市民ボランティア 3. 認知症サポーター ④ 専門職(看護師、介護士、作業療法士、医師など) ⑤ その他(カフェマスター 4時間1000円を支給 2交代制シフト 1月現在79名)
ネットワーク	① 社協 ② 地域包括支援センター ③ 医師会 ④ 民生委員 ⑤ 老人会 ⑥ その他()
実施内容	お盆正月の数日以外は、1年を通して毎日開催。 北九州市・NPO法人(老いを支える家族の会、認知症・草の根ネットワーク)・連携協定団体(北九州市医師会・北九州市歯科医師会・北九州市薬剤師会)の協力。 設置された総合保健福祉センター内には、精神保健福祉センター・障害福祉センター・福祉用具プラザなどもあり、それらとの連携も良い環境。 カフェマスターは、現在第4期養成まで行われ、認知症に関する知識などを学ぶ。修了生は認知症カフェなどで来所者への対応を行う。 認知症介護家族交流会・相談コールセンター・認知症チェック・介護予防普及などと、市が目指す支援の1つとして、この認知症カフェが位置づけられている。
効果、課題など	気軽に立ち寄れる場所として、カフェでの一時が来所者のリフレッシュにつながる支援を心掛けている。 カフェでのめなしは、「カフェマスター講座」を受講したボランティア等が行い、相談などにも対応しているが、さらなる質の向上を目指す。 認知症本人が生きがいをもち参加できる取り組みを作る。 男性の参加を増やす。そのために食事提供の検討。 拠点認知症カフェとしてモデルケースを作る・地域の認知症カフェへの支援。
認知症カフェの必要性・課題などについて	病気・障害・年齢にかかわらず見守りやサポートにつなげる。 なんくるカフェ(難病)・寺楽茶(引きこもり)など様々なカフェとの連携が始まっている。
看護学部が設置・運営することの特徴・意義などについて	認知症の人だけを対象とするのではなく、地域住民を対象とするというスタンスで行われていた。 居場所づくり、つながり、見守りなどを行う中で、支援が必要な場合には対応しているという印象である。 行政や連携協定のある団体、また、長年地域で高齢者や認知症の方たちを支えてきたNPOとしての実績が強みである。 行政からの金銭的支援には期限があり、その後の資金については、懸念を残すところである。

きの過程から生み出されたものは、穏やかで人を和ませる力があるように感じられた。

- ・「カフェぽっぽ」では、理学療法士や音楽ボランティアなど、精通した知識や技術の力を再確認した。専門職の場合、ともすれば一方的な関係を生み出しがちな点が懸念されるが、ここでは単純な知識や技術の集積とその発揮ではなく、人と共に楽しむ、一緒に考える、やってみるという姿勢が、参加者を引きつけていて感銘を受けた。また、質問や意見なども参加者から多く出され、中には辛辣なものもあったが、理学療法士は丁寧に返答していた。日ごろから平等な関係性が醸成されているからこそ、このようなやり取りができていくことがよく理解できた。

(3) 北九州市認知症カフェ見学による気づき

認知症カフェでは、仕事や役割を持つという当事者への対応を中心に据える。並行して、当事者を支える住民(いずれ当事者になる)の養成、専門職(いずれ当事者になる)の認知症対応技術と知識の向上のための養成を並行して行う。また、これらの実行に当たっては、まず地域アセスメント・当事者アセスメントを行う。さらに、認知症カフェの取りまとめを行うことによって、情報を共有し、認知症のある方々や、現在は認知症など生活をしづらくする問題はないが、今後の不安や悩みを持つ方々も含めて、その居場所や相談しやすい環境を提供できるようにする。これはすべて、認知症カフェと認知症の

表II-10 認知症カフェ調査項目

調査日：平成29年2月19日（日） 訪問者：大塚

カフェの名称	認知症予防カフェ ぼっぼ
所在地	〒807-0872 北九州市八幡西区浅川2-15-20
対応者	後藤外科胃腸科医院 事務長 後藤友子氏
運営母体	1. 家族会など 2. 社会福祉法人 3. 市町村 4. NPO法人 ⑤ 診療施設 6. その他()
運営費用	年間 約 万円 不明
資金源	① 自己資金 ② 参加費(300円) 3. 財団などの助成金 4. その他()
カフェの場所	1. 個人の家 2. 公民館など公共の施設 ③ 病院付属施設 4. その他()
カフェの目的	認知症の人・その家族・認知症でない方も気軽に参加でき楽しい時間を過ごす、何でも相談できる場所、医療や介護について役立つ知識を得る
開催頻度	1. 週 回 ② 月 1 回 3. 年 回 4. その他()
開催時間	1. (10)時～(12)時まで
食事	1. 持参 2. 施設が提供 3. その他(茶菓のみ)
参加費	1. 無料 ② 1人1回 300円 3. その他()
参加者	人数：1回約 20 ～ 30 人。当日男女比：1:7 認知症以外の地域住民や福祉関連機関などの参加あり 年齢層：様々 内訳：地域住民・主催病院入院患者・移動販売商店・低所得高齢者住宅主催者・地域包括支援センター職員・介護事業経営者など
ADL	① 家にもっている ② 散歩にでかける ③ 買い物に行く ④ ボランティア活動をする ⑤ その他(隣接病院に入院中)
知的活動	1. 認知症の程度：軽度認知症ではないかと思われる方から、元気な方まで様々
交通手段	① 自分で ② 家族に連れられて 3. 施設の送迎バスなど ④ その他(隣接主催病院から)
スタッフ	1. 家族会のメンバー 2. 市民ボランティア 3. 認知症サポーター ④ 専門職(看護師、介護士、理学療法士、作業療法士、医師など) 5. その他()
ネットワーク	1. 社協 ② 地域包括支援センター 3. 医師会 4. 民生委員 5. 老人会 ⑥ その他(地域商店 NPO ボランティア)
実施内容	参加者は女性22名、男性7名、スタッフは院長・事務長・理学療法士などを含め7名、音楽ボランティア3名の計39名。 まず音楽ボランティアと院長との合奏(尺八・琴・三味線・オルガン)を聞き、その後合奏。 さらにPTIによる「転倒予防」の話があり、それに対し参加者から活発な質問があった。 加えて、他のPTIによる指体操やコグニサイズ(ダンスにアレンジ)などを全員で行った。 また、移動販売商店のお知らせ、低所得高齢者住宅主催者からの入居案内などの情報提供も行われた。
効果、課題など	地域の住民の参加が多く、多くの参加者がこのカフェに来ることを楽しみにしている様子が伺えた。 毎回多彩なメニューが計画されている。今回は演奏を聞き、その後全員で合奏、また転倒についての講演が行われた。 講演では、転倒の原因・予防・自宅の環境調整等の説明があった。話は軽妙でわかりやすく、参加者は熱心に聞き、多くの質問が出た。 コグニサイズにも工夫がみられ、足元がふらついたり、うまくついていけないことも、スタッフのフォローで笑いに包まれ、楽しい運動だった。 地域の商店や高齢者住宅主催者などからの情報があり、生活不安の軽減手段として、参加者は真剣な表情で聞き入っていた。 病院は1年前から住診・訪問介護・訪問リハ等の在宅支援を積極的に実施し現在に至っており、その一環として認知症カフェを開催。 地域に根差した活動の広がりにはまだまだ努力が必要と事務長、またボランティア募集など、スタッフの充実も図っていきたいとのこと。
認知症カフェの必要性、課題などについて	病院経営にとって、様々な活動が盛んになることの意味合いは大きいと推察された。地域でも様々な活動に積極的な院長として認識されている。 事務長もコスプレするなど、「これぐらいしないと人は参加してくれません」と意欲と決意を感じさせる発言が多かった。 講演やコグニサイズを指導した2名のPTIも、主催病院での医学的リハ担当、訪問リハ担当で、参加者の扱いに慣れ、引き込むことに長けていた。 参加者の質問や意見も、はっきりしたものが多く、主催側と参加者の対等な関係が根底にあることが伺われた。
看護学部が設置・運営することの特徴、意義などについて	認知症カフェ運営の積極性や、これまでに蓄積された参加者を引き込む力の発揮には学ぶべきことが大きいと思われた。

方々を支える街づくりは切り離せない、という認識のもとに行う。

(4) 地域アセスメント

まずは、大学近隣のアセスメントを行い、必要に応じて呉市に広げていく。その中で、老人会・町内会・認知症当事者や家族の会、介護支援専門員協議会・行政担当部局など関係者の意見収集を聞き取りやアンケートで行い、現在の高齢者や認知症の方の現状や困りごと、意見などの把握を行う。このことを基盤として、大学が目指す認知症カフェとはどのようなものが求められているのかを理解する。あくまでも地域、地域住民、当事者主体として、ニーズを把握する。

・仕事をする、役割をもつ

認知症があっても、仕事をしたり、何らかの役割をもつ場所としてのカフェづくり。何が得意なのか、何がしたいかを本人もしくは家族から聞き取り、仕事を作り出せるかなどを検討する。仕事や役割を持つことでの、当事者の変化を追う。何らかの褒賞(金銭やそれに代わるもの)も重要と考える。

2) 認知症カフェのとりまとめ

現在呉に9か所あるカフェの情報発信が単独で行われるのではなく、その特徴などを共有し、チームとして共同して広めていくよう取組む。各カフェは運営も参加者への対応も様々であるが、共有しておいたほうが良い基盤とは何かを、上述の地域アセスメントなどで把握し、共有項目の上に特徴を出せるようにする。地域のカフェが地域の住民にとって居場所の1つとなるよう、市全体でとりくむ街づくりの一環として、大学が市とも協議しながら取り組む。以下、茨城県の例を参考にした取り組みが考えられる。

- (1) 住民が住民を育てる方法や、認知症に対応できる「マスター（仮称）」の養成の方法、「シルバーリハビリ体操士」養成の方法などを参考に、呉市に見合った方法や認知症に対する汎用法の検討を大学が行い、まずは呉市と、その後可能なら広島県と協力・共同して組織を作る。大学はマスター（仮称）の教育や組織化を手伝う。
- (2) 活動家を選ぶ（公募 ただし60歳以上のみ）→育てる（カリキュラムの洗練化）→組織する（ネットワーキング）→フォローする→褒賞する（市からの感謝など）
- (3) 3級（研修30時間）→2級（研修25時間）→1級（研修20時間・実習30時間）、1級取得者は2・3級の人を教えることができる
- (4) 専門職の認知症理解、対応技術向上のための取組み
 専門職の認知症に対する知識と技術を高める段階的な養成。上述の住民によるマスター（仮称）の養成と並行して行う。ここで養成された方々は、マスター（仮称）の養成や認知症カフェや地域公民館講座などへの講師としても派遣されるなど、その力を発揮していただく方策を検討する。大学は養成を手伝う。

4. 講演会に参加して

「若年性認知症を学ぼう」 聴こう！学ぼう！若年性認知症～「地域で暮らす」に必要なこと～（主催：認知症のひとと家族の会 広島県支部 2017年3月7日 広島市西区民文化センター）

講演Ⅰ 認知症とともに生きるということ

講師 おれんじドア実行委員会 代表 丹野 智文氏

講演Ⅱ もう介護はやめて、パートナーになろう

講師 東北福祉大学総合マネジメント学部教授 高橋 誠一氏

丹野氏の講演の趣旨

ご自身が若くして認知症と診断された。病気をオープンにすることの葛藤、偏見を持っている人が多い、子供がいじめに会うのではないかなど、不安を感じていたがどこに行けば良いかわからなかった。認知症家族の会で、色々な人と出会った。しかし、人々の認知症者への接し方から次のようなことが現実であったと話された。それは、介護者のやってあげなければという心が当事者の出来ることを奪ってしまう、当事者が話をしようとしても介護者が話をしてしまう、出来ないもの、やれば失敗すると思いつけてくれる、こうした事ができることを奪ってしまう。認知症者という周囲はなににもできないと決めて助けてくれる、その優しさが認知症者の力を奪ってしまう。優しさが悪い方向へ導いてしまう。当事者は失敗していることは分かっている、分かっているけどどうして失敗するのかかわからないので介護者は出来ないときめてしまう。その結果、自信を失う。失敗して怒られると病気は悪い方へ向かう。「支援」ではなく一緒にやってくれる「パートナー」になってほしい。失敗しても当事者にやらせてほしい、守られるのではなく、パートナーの力をかりて守られる、自立する、自分らしさを保つということ、そうすることで病気は良い方向に向かう、そういう環境が大切である、と力説された。認知症者が行動するとすぐに責任は誰が？というが責任は当事者がとるしかない。高橋氏もパートナーの重要性を強調された。

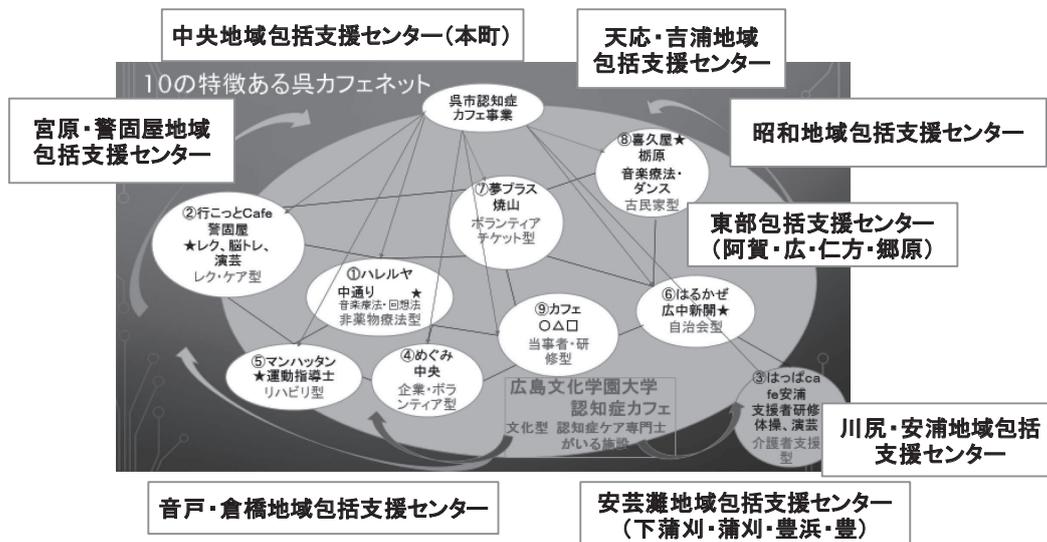
“おれんじドア”は、認知症者が語る、当事者が話し合う場として開設された。不安になったとき、ここにきて一歩前に進むことができる。社会との繋がり、社会貢献（講演活動は認知症者にもできる）もできる、そういうところだ。おれんじドアは認知症カフェではない。認知症カフェは面白くない、いつ発症したの、介護保険のこと、どこでも同じことを聞かれる。集めるカフェではなく、集まるカフェ、当事者が“行きたいカフェ、選べるカフェ”を作ってほしい。当事者が何を求めているのかは当事者に聞けばよい。人数はすくなくとも、たとえ一人でも行きたい人が行くカフェなら成功。広島の良いところを入れたカフェを期待する、とのお話は大変参考になった。

5. 連携

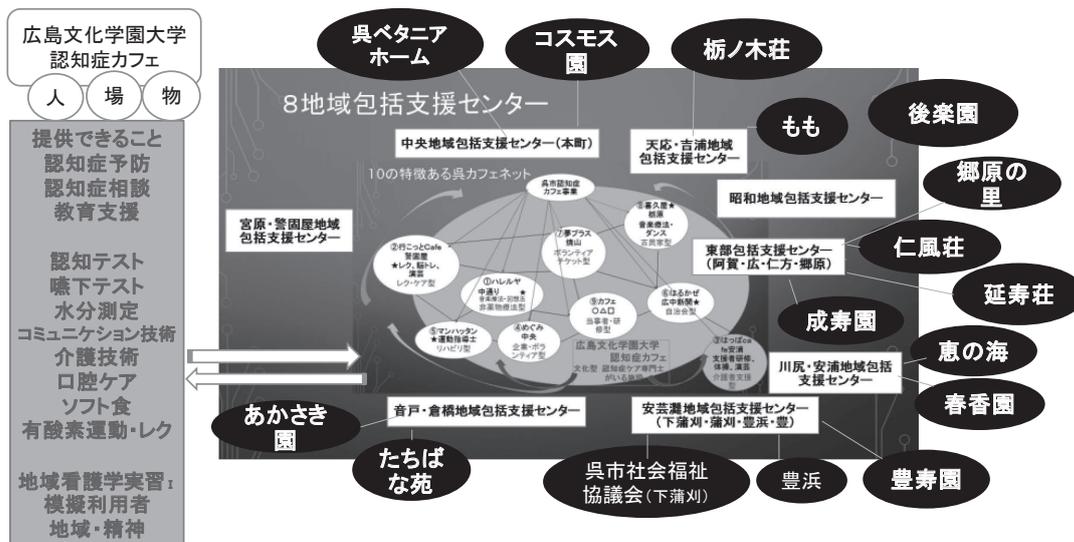
呉市には、9カ所の特徴的な認知症カフェ事業が活発に地道に行われていること、これらのカフェの

多くは高齢者カフェの性格と認知症カフェの性格を併せ持つものであることが分かった（図II-1）。同時に、8つの地域包括支援センターと認知症カフェを結ぶことにより、住まいに近いところ、自分に合ったところを選び、時には、別のカフェに行き来する。カフェ間交流などすることにより、引きこもりを防ぎ、さらなるカフェの活性化も図れると考える（図II-2）。ほとんどの認知症カフェの背景・母体には、高齢者サービス施設があり、介護負担の軽減や在宅と施設の敷居の低い関係が期待できると考える。これらのカフェはいずれも本学の看護・来んさいカフェとの連携を希望している。従って、図II-3に示すように認知症カフェ間、地域包括支援センターと連携ネットワークを紡ぐ役割に広島文化学園大学が寄与できると考える。また、看護学生の受け入れに対しても大きな期待が寄せられていることが明らかとなった。こうした認知症カフェの最大の問題点の一つにマンパワーが不足している実態が浮かび

8地域包括支援センターとの連携づくり



図II-2 呉市認知症カフェ事業と地域包括センターの連携作りをイメージした図



図II-3 認知症カフェ、地域包括支援センターとの連携ネットワークの構築

上がってきたが、看護学生を派遣することによりこの点の解消の助けとなるであろう。さらに、世代継承性およびサポーターの養成という意味においても意義深い。このことから、学生派遣型のカフェは本学カフェの特徴を発揮する一つのあり方であることが示唆された。また、認知症者の模擬患者として学生実習への参画、認知症者の語り部としての授業への参加についても希望者を発掘できており、これらを実現できれば、認知症者の社会参加という意味においても大学ならではの可能性を提供できるものである。

他県のカフェの在り方も導入すればよいが、もともとある資源をうまくつなぐことが呉市としての特徴や、各認知症カフェの特徴をいかし継続していけると考える。

以上広島市および全国の認知症カフェの現状調査を行い、カフェモデルの基礎的研究とする。このように調査しながら、実践を推進していく必要がある。目の前に、引きこもりでお困りの方、医療につけなくてお困りの方、偏見により受け止められない方々がおられる。もたもたせずに行き届くところから介入する必要がある。以下に概略を示す(図Ⅱ-4)。

広島文化学園大学の知的資源、人的資源、特に学生を活動させることにより、多くのことが可能となる。学生にとっても、生きた学習の体験の場となる。

提供できる様々なこととして、①認知症相談・教育支援といった相談教育活動による認知症予防、②認知テスト・嚥下テスト・水分測定などの検査活動、③認知症の人とのコミュニケーション技術、介護技術提供、④口腔ケアの実習、⑤ソフト食調理実習、⑥有酸素運動・レク活動、⑦模擬利用者として、授業への協力要請、などがある。

■ 考察

1. 効果と問題点の集約

認知症は、高齢化が進むと4人に1人が罹患する可能性が指摘され、今や特殊な疾患ではなく誰でもなり得る疾患と捉えられるようになってきている。それだけに、物忘れが増えてくると認知症への不安がつのり、また発症すると本人はもとより家族・支援者への負担が増大する。しかし、認知症が疑われても本人が病院へ行きたがらないことで治療が遅くなったり、認知症様の症状があっても原因は硬膜下血腫や正常水頭圧であって手術をすれば良くなるケースもある。こうした対処の遅れの要因の一つに「認知症者」とみられる社会からの偏見がある。また、たとえ認知症であったとしても、早期認知機能障(MIC)の段階で適切な治療を開始し、生活習慣を改善することで、認知症への進行を遅らせたり、人によっては正常に戻るくらいかなり良くなる可能性が指摘されている。こうした状況下に認知症の発症予

- ビジョン: 認知症を知って、地域で支え合えあう共生システム構築
- 認知症サポーター養成 (研修)1学年、学部、全学へ
- 認知症カフェネット構築 28年度 準備、29年度 10か所、呉市、全地域包括へ
- 認知症予防・介護予防教室 29年度 ソフト食、口腔ケア、コミュニケーション等
シリーズ化(タイプの点数)
- 認知症の人、その家族、カフェ関係者、地域住民、学生を対象に認知症カフェ展開
- 1回/月
- 場所 ネットワーク会議は大学 広報は、呉市
- カフェ 大学または〇〇 (実施負担、継続性を考慮)
- 研究対象(認知症の人、家族)、(学生、地域住民、カフェ運営者、自治体)

図Ⅱ-4 広島文化学園祭学型認知症カフェ「看護認知症カフェ」発足のPDCA

防、認知症の改善・進行を遅らせる、認知症になっても地域で幸せに暮らす社会の構築などの方策は喫緊の課題となっている。認知症カフェの役割として、認知症者およびその家族の方が安心して過ごせる場、地域の人々と交流できる場、気軽に相談できる場を提供することにある。

現在開設されているほとんどの認知症カフェの背景・母体には社会福祉法人、高齢者サービス施設や医療施設があり、スタッフも社会福祉士、看護師、介護士、理学療法士および包括支援センターとの連携のもとに行われている。いくつかの認知症カフェは、内容的には認知症予防カフェにウエイトをおいたものであり、高齢者カフェとしての活動が主たるものである。認知症カフェを実態としたものでは、認知症者と家族介護者のための研修会、介護予防、社会資源について情報収集などが行われている。医療施設では、軽食と喫茶で話し合う場を提供している他パワーポイント・マイクなど設置され学習環境が整えられ、医師、精神保健福祉士、ケアマネージャー、栄養士、看護師等の専門職が多数参加しており、これら多彩な専門スタッフによる勉強会を中心に行い、認知症についてあらゆる質問に対応できる体制がとれている。

呉市には、それぞれに特徴的な認知症カフェ事業が活発に地道に行われていることがわかった。しかし、認知症カフェにおいて認知症者を受け入れるには相当する専門職の存在が欠かせないことが認識され、病院・診療所など以外でこうした条件を満たしている認知症カフェは少なく、そこではもっぱら認知症予防カフェ、即ち高齢者カフェの色彩が濃い。そこで、8つの地域包括支援センターと認知症カフェを結ぶことにより地域に密着した“自分が行きたいカフェ”を選択できる体制を構築し、またカフェ間交流などしてさらなるカフェの活性化も図れると考える。この点に関して地域包括支援センターと連携ネットワークを紡ぐ役割に広島文化学園大学が寄与できると考える。北九州市において見られる様な、認知症者が仕事や役割を持つという当事者への対応を中心に据えることも重要である。また、カフェ来所者への対応を行うカフェマスターの養成を組織的に行っているカフェもあり、地域住民の中に、認知症への理解者が段階的に増えていくという意味でも必要な取り組みであると思われた。継続性を確保するためには、住民が住民を育てるサポーターの養成が重要である。

諸外国のカフェ状況として、認知症ケア先進国ともいえるイギリスとオランダの認知症カフェが、認知症のひとたちの社会に参画するための場を提供する大きな役割を担っている。我が国の認知症カフェはこれらをモデルにしている。

イギリスでは、メモリーカフェ、アルツハイマーカフェと呼ばれ、物忘れなど気がかりなことがあれば立ち寄れる場所で銀行やスーパーの並びにあるお店で開設されているので、買い物ついでに立ち寄れるコンタクトポイントとしての一次予防の場所として、どこかにつなげる役割を担っているものから、アルツハイマー協会の支部のようなところが行っているもので、認知症者とパートナーが個々に密に対応する形⁵⁾をとっているものとそれぞれ明確に異なった役割を果たしている。

昨夏本学を来訪したドイツカトリック大学の講演会で⁶⁾ シーラからも、認知症患者という上から目線ではなく認知症を持っている人々という目線で社会が連携してサポートしていくシステムの重要性についてお話があった。

オランダでは、オデンハウスというのがあって、ここは毎日開いていて、いつでも誰でも自由に出入りし、会ってお互いが助け合う場所として、来て何をしてもよいし、何もしなくてよい、家の延長みたいなところがある。行政は関与しない。イギリスのメモリーカフェに相当する。アルツハイマーカフェは、自治体や Alzheimer Nederland を通じた助成金などで、月1回2時間程度どこのカフェでも同じタイムテーブルで各30分づつ、①コーヒータム、②テーマを決めた専門職によるレクチャー、③参加者と講師によるディスカッション、④講師も交え、飲み物を取りながらの歓談である。この他ミーティングセンターがって、診断とケアの認定を受けている人を対象とし、認知症者のケア、介護者へのケア、両者へのケアが行われる（以上、文献3より引用）。

すなわち、①常時開設していて自由に誰でも立ち寄れるコンタクトポイントとしての役割、②月1回程度の開設で参加者同士の触れ合い、講演などを通して一次予防の役割、③認知症者と介護者のケアといった役割に分類でき、日本で開設されている認知症カフェは②を展開しているところが多く、どちらかと言えば高齢者カフェと認知症予防カフェといった感じのところが多い。③認知症者のケアと介護者

へのケアとそれぞれの役割を明確にしている。呉市の銀行が、イギリスのメモリーカフェ型カフェを参考にした、来行の際にいつでも立ち寄れるカフェ開設を考慮しているとの情報もあった。

2. 看護・認知症カフェの目標

我が国の高齢者カフェ、認知症カフェでは上記の様な複数の役割を、それぞれのカフェの地域性、経営力、サポート力などに依存して様々に行われている。本学が開設する“来んさいカフェ：呉”では、看護・高齢者カフェと看護・認知症カフェを併設するのが特徴である。高齢者カフェでは、健康調査とフィジカルエクササイズの実施による健康増進を心がけているが、認知症カフェでは、主として認知症者の精神的支援による認知機能の改善ないし進行遅延、また、認知症の人にやさしい町づくりのための社会活動が目標となる。しかし、両カフェにおいて参加者の触れ合いの場、社会との繋がり場の場として役割は特に認知症予防という観点から共通した重要性を有している。認知症カフェでは、前述したように、医療機関とは別に、その開設には、社会福祉法人、高齢者サービス施設や医療施設などを母体とし、スタッフも社会福祉士、看護師、介護士、理学療法士および包括支援センターなど多くの専門職員を必要としている。こうした背景により、いくつかの認知症カフェは、内容的には認知症予防カフェにウエイトをおいたものとなっている。しかし、いくつかのカフェでは、少人数の参加ながら、認知症の人と家族を中心に交流が行われている。本学が開設しようとする認知症カフェにおいても認知症の人の参加を得るには、開設後一定期間の実績を得て、地域社会に浸透する必要が予測され、今後根強い取り組みがなされなければならない。今回の訪問調査で明らかになったもう一つの点は、既存のカフェが学生の参画を強く希望していることである。このことから学生派遣型カフェを展開することが看護・認知症カフェの特色となりえ得る。このことにより、若い世代との交流による効果、世代継承性の促進、学生自身の介護力の向上と学生サポーター養成に繋がると期待できる。同時に、カフェ間のネットワーク形成に本学が寄与するのも有効な形であろう。

江口らは、中等度のアルツハイマー型認知症患者に対する屋外・屋内散歩が自律神経系に与える影響について報告している⁷⁾が、こうしたカフェによる事業の結果がどのような効果に結びついているかについては主観的な観察事象に留まり、客観的なエビデンスが得られていない現状がある。

さらに、認知症には、アルツハイマー型認知症、血管性認知症、レビー小体病、前頭側頭葉変性症の他に認知症をきたす疾患として緩徐進行性高次機能障害⁸⁾や、ほんとうは認知症とよく似た症状を呈する特発性正常圧水頭症などがあり、認知症について正しく理解するための講座も欠かせない。また、認知症状が発症する30年以上も前から実は病態が始まっていることも知られている。近年、糖尿病は認知症発症の重要な危険因子とされてきている。さらには小学生のBMIから肥満児が多くなってきていることも指摘されている。これらのことから食生活の改善、生活習慣病についての認識などの啓蒙活動も認知症予防に欠かせない活動である。

本学は看護学部であり、認知症看護強化コースを設けて認知症看護のスペシャリスト育成基礎づくりを行っているという特色がある。地域看護実習Ⅰ教育カリキュラムの実践において一般学生にとっても認知症の方、家族の方達と接することにより多くのことを学ぶことができるという教育的効果も期待できる。また、認知症者の模擬患者として教育に携わっていただければ社会参加型のカフェとしても他に類をみないものとなり得る。本研究は、集いの場となる認知症者カフェを提供することにより、認知症者の認知機能が異世代交流、役割・能力の発揮を通して生活の活性化やQOLの向上につながることを明らかにし、こうした取り組みから得られるエビデンスを客観的に評価し、認知症カフェモデルの礎としたい。

大学参加型としては、福山平成大学福祉学科は認知症カフェ「ガーデンカフェ」に学生が参加し、また兵庫大学では看護学科と社会福祉学科の共同企画として、キャンパス・カフェを学内でオープン（2017年3月）するなど、いくつかの大学では、地域の方々と学生がふれあい、認知症について一緒に考え寄り添うコミュニティーカフェの形を展開している。

本学が目指している学生参加型のカフェは、これらの大学と共に、サポーターの世代継承という意味においても、また、認知症になっても、地域のコミュニティーの中で人としての尊厳や尊敬の念が失わ

れない認知症の人に優しい社会やコミュニティーを作っていく上においても若い学生参加型カフェの先駆的役割が期待される。

■ まとめ

広島文化学園大学「来んさいカフェ：呉」看護・認知症カフェ開設に向けて既存の認知症カフェについて、呉市内10カ所、広島県・北九州市6カ所の訪問調査を行い情報を収集した。認知症カフェと呼ばれているものは、内容的には両方の性質を兼ねているものが多かった。得られた成果を以下に集約した。

1. カフェの効果について

これまでの調査により、認知症カフェでは、認知症者やその家族が気軽に立ち寄る場所を提供し、多くの専門職のもとに介護相談、家族支援が行われている。また、認知症者に限らず高齢者の参加も多く、調査表にあるような様々なイベントが認知症予防、早期記憶障害（MCI）の改善などの効果を上げている。認知症者自身のイベント参加もあり、地域の人々との交流が行われている。これらの実態は、認知症の人と家族の会が行った調査報告³⁾と合致するものであった。

2. 課題

- ・認知症者の参加が少ない。その理由の一つに、社会から「認知症者」という眼でみられるので「認知症カフェ」という表現が好まれない。多くのカフェでは高齢者の認知症予防を目指している。いかにして認知症者とその家族の方が参加できるかの方策が必要。
- ・スタッフとして、看護師、包括支援センター職員、介護支援専門員、認知症家族の会会員、その他医療職員など様々な専門スタッフを必要としている。
- ・様々なイベントを企画するには、多くのサポーターを必要とし、地域住民のサポーターとしての養成・参加を必要としている。
- ・安定した運営には、継続的な経済的基盤が必要。
- ・こうしたカフェによる事業の結果がどのような効果に結びついているかについては主観的な観察事象に留まり、客観的なエビデンスが得られていない現状がある。

3. 看護・認知症カフェの方向性

- ・地域性を重視したカフェとして大学に拠点を置き、看護師および看護学生主導のカフェを開設する。
- ・学生の参画は授業の一環として組み入れる。学生派遣の要望が強いので、「学生派遣型カフェ」を考慮する。
- ・看護学生の参加を特色として、学生教育、次世代サポーター養成、世代継承性を行う。
- ・認知症者のカフェへの参画による達成感、生きがい感の充実を促進すると同時にサポーターとして養成する。
- ・呉市の認知症カフェ間と地域包括支援センターとの連携ネットワークを紡ぐ役割に本学が寄与し、カフェ間の交流や行きたいカフェを選択できる情報提供の核となる。
- ・各種活動を通じて社会が認知症に関して正しくし理解し、認知症者が住み慣れた地域で楽しく暮らせる社会の構築に寄与する。
- ・本事業により得られるエビデンスに基づいて看護カフェモデルを構築する。

引用文献

- 1) 平成24年度厚生労働省 社会保障審議会 ―介護給付費分科会 第115回資料 http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000065682.
- 2) http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/nop1-2_3.
- 3) 認知症カフェのあり方と運営に関する調査研究事業 報告書 (2013);平成24年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健増進等事業 認知症の人と家族の会
- 4) 佐藤友美, 吉田留美, 中西敏子他 (2016);施設入所中の若年性認知症の人が認知症カフェに外出することの有効性の検討, 日本認知症ケア学会誌, 15(2), pp.513-521.
- 5) Morrissey MV(2006):Rethinking the benefits of an adapted version of 'Alzheimer Café' for individuals with Alzheimer's and their partners. Int J Psychiatr Nurs Res. Sep;12(1):1393-401.
- 6) Lina Schirra-Weirich (2017); ドイツにおける認知症患者と家族の事例 ―Person Centered Careに焦点をあてて― ドイツ国 NRW カトリック大学との教育交流講演会 7月18日 広島文化学園大学
- 7) 江口喜久雄, 小浦誠吾, 小川敬之, 江口奈央 (2016);中等度のアルツハイマー型認知症患者に対するアクティビティとして屋外・屋内散歩が自律神経系に与える影響 日本認知症ケア学会誌 15, 448-455.
- 8) 認知症 神経生理学的アプローチ 辻 省次, 河村 満編 P148-287, 中山書店 2012.